

令和 3 年 6 月 9 日現在

機関番号：32665

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2020

課題番号：18K12454

研究課題名（和文）学術英語文章力の育成にむけた教師と学生、ICTの有機的連携モデルの構築と検証

研究課題名（英文）Development and validation of an organic collaboration model among teacher, student, and ICT for promoting academic writing education

研究代表者

渡 寛法（WATARI, Hironori）

日本大学・文理学部・准教授

研究者番号：20732960

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、大学英語教育における学習者のライティング技能の育成にむけ、自律的学習態度とパフォーマンスの関係、およびオンライン上における文章評価活動を通じた学習効果の検証を目的とした。まず、既存のアカデミックライティング教科書を収集し、どのようなタスク活動、評価基準・ルーブリックが用いられているのかを横断的に分析した。次に、学習者にとって効果的なフィードバックとは何かを明らかにするため、英語に苦手意識をもつ大学生を対象に、自律的学習態度とパフォーマンスに関する調査を実施した。さらに、オンラインを通じた学習者の文章評価活動を対象に、文章評価とパフォーマンス・学習態度・文章観の関係について検証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、大学におけるライティング教育向上のために、学習者の自律的学習態度とパフォーマンスの関係解明と、オンラインを活用した文章評価活動の効果検証を目指した。本研究の意義は以下の3点である。（1）アカデミックライティング教材の現状把握と課題整理を行った。（2）英語に苦手意識をもつ大学生の自律的学習態度とパフォーマンスの関係を明らかにした。（3）オンラインによる相互文章評価活動を行い、学習者の文章評価とパフォーマンス・学習態度・文章観を検証し、今後のライティング指導方法の方向性を示した。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to examine the relationship between autonomous learning attitudes and performance and the effects of online writing assessment activities on the development of learners' writing skills in college English education. First, existing academic writing textbooks were collected and cross-analyzed to identify the types of task activities, evaluation criteria, and rubrics in use. Next, in order to clarify what kind of feedback is effective for learners, a survey on autonomous learning attitudes and performance was conducted among university students who have difficulty with English. In addition, an online evaluation of learners' writing activities was conducted to examine the relationship among writing evaluation, performance, learning attitudes, and writing views.

研究分野：英語教育

キーワード：ライティング 学習態度 パフォーマンス 文章評価 文章観

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

ライティング教育では、教師によるフィードバックに基づいた書き直しは文章力を向上させ、学習プロセスにおいても重要であることが指摘されている (Swain & Lapkin 1995)。アカデミック・ライティングにおけるフィードバックの対象は、語彙・表現・文法・引用の仕方などの形式面に加え、構成・内容・ジャンルにおける文章規範など幅広い。また、フィードバックは教師から学生への一方通行ではなく、学生同士が書き手と読み手を経験しながら、協働的に行うこともできる。近年では ICT の発達を背景に、Criterion® など文章に対する自動採点システムの開発・研究も進んでいる。一方で、これまでのフィードバック研究では、学習者の学習態度とパフォーマンスの段階性や、タイプごとの教師フィードバックや相互評価によるピア・フィードバックの効果は十分に検証されてこなかった。とくに日本人学習者は、ライティングだけでなく、英語学習にも苦手意識をもつものが多く、英語の技能面だけでなく、情意面を考慮したフィードバック指導や、協働学習活動の在り方について研究・検証が必要とされている。

2. 研究の目的

上記の背景を踏まえ、本研究は、大学英語教育における学習者のライティング技能の育成にむけ、自律的学習態度とパフォーマンスの関係、およびオンライン上における文章評価活動を通じた学習効果の検証を目的とした。具体的には、本研究では、以下3点の解明を目的として設定した。

(1) 日本の大学で用いられている既存のアカデミック・ライティング教科書を収集し、どのようなタスク活動、評価基準・ルーブリックが用いられているのかを横断的に分析し、整理する。

(2) 学習者にとって効果的なフィードバックとは何かを明らかにするため、英語に苦手意識をもつ大学生を対象に、自律的学習態度とパフォーマンスに関する調査を実施する。

(3) オンラインを通じた学習者の文章評価活動を対象に、文章評価とパフォーマンス・学習態度・文章観の関係について検証する。

3. 研究の方法

上記の3つの目的を達成するために、以下に示す方法で研究を行った。

(1) ライティング教科書分析

日本の EAP (English for Academic Purposes) カリキュラムを実施している大学で1年生の授業で用いられているライティング教科書を10冊収集した。比較の観点から、EAPの入門レベルである“From Paragraph to Essay”を扱った教科書を対象とした。6冊は英語圏、4冊は日本国内の出版社によって作成された教科書であった。分析は、タスクやスキルのタイプ、ピア活動の有無やタイプ、評価方法(評価基準やルーブリック)という3観点で行った。

(2) 学習態度とパフォーマンスの関係解明

2017年度に関西の公立大学に通う英語非専攻の1年生3クラス92名を対象とした。データの収集は2つの調査を通じて行った。1つめは授業開始時(4月)における自律的学習態度に関するアンケートである。Pintrich & De Groot (1990)から「自己効力感」、「内発的価値」、「自己調整」に関する16項目を選択し、和訳、文言を調整した質問調査を Google Form を使用して行った。2つめは授業開始時(4月)および、授業終了時(12月)における TOEIC® ITP のリスニングパート(495点満点)のスコアをパフォーマンス指標として用いた。以上、2つの調査において欠損のない71名を分析対象とした。

(3) 文章評価とパフォーマンス・学習態度・文章観の関係解明

2020年度、関東の私立大学における前期ライティング授業「アカデミック・ライティング」を受講した1・2年生、54名を対象にした。毎週の課題ワークシートは LMS システムを通じ提出され、授業担当者が個別にオンライン上でコメントフィードバックを行った。学習者は最終課題として、引用を用いた論証レポートを作成し、オンライン上で自己評価と相互評価を行った。

データの収集は3つの調査を通じて行った。1つ目は授業の最終課題レポートの自己評価・相互評価活動である。学生は、15項目からなるライティング評価シートを用いて、自分が作成したレポート、及び、匿名化されたクラスメートのレポート2編の評価を行った。

2つ目は授業終了時における自律的学習態度に関するオンライン・アンケートである。Pintrich & De Groot (1990)から「自己効力感」、「不安」、「内発的価値」、「自己調整」に関する項目を用い、和訳および文言を調整した質問調査を Google フォームを使用して行った。

3つ目は、授業内における文章観に関する課題文章である。第2回の授業課題で、学生は「良い文章とはどのような文章だと思いますか」という課題で文章を作成した。

4. 研究成果

(1) ライティング教科書分析

2010年以降に国内外で出版されたアカデミック・ライティング教科書10冊を分析した結果、以下の3点が明らかになった。1点目は、すべての教科書はプロセス・ライティングを採用しており、Brainstorming, Organizing, Drafting, Reviewing, Revising という流れで文章を組み立てる構成になっていた。“From Paragraph to Essay”レベルの教科書では、構想・執筆・点検というライティングプロセスを身につけることに主眼が置かれていた。2点目は、英語圏のテキストには、レビュー用シートやルーブリックがあるのに対し、日本の国内教科書には、Can-do リストやルーブリックはほぼ見られなかった。英語教育やライティング教育において近年、学習者がなにを学ぶのか・学んだかの明示・点検が強調されているが、教材ではいまだ反映されていないことが明らかになった。3点目は、ピアレビューなどの協働学習の活動を取り入れた教科書は少ないことである。ライティング技能の育成において、ピア活動の効果や重要性が指摘されているが、国内教科書は、独力によるライティングに主眼が置かれており、他者からの文章評価や、協働ライティングの考え方は取り入れられていなかった。

(2) 学習態度とパフォーマンスの関係解明

本調査では、英語授業を受講する英語学習に苦手意識をもつリメディアル大学生を対象とし、「自己効力感」、「内発的価値」、「自己調整」が、パフォーマンスとしてのTOEICスコアとどのように関連しているのかを検証した。分析の結果から、自律的学習態度の上位群は、下位群よりも有意にスコアが伸びていた。また、要素別に見ると、「自己効力感」のみがTOEICスコアに正の影響を与えていることが明らかになった。パフォーマンスと「自己効力感」「内発的価値」「自己調整」の関係を分析したところ、下位群、上位群ともに、「自己効力感」のみがパフォーマンスに有意な影響を与えていた。高い、低いにかかわらず「自己効力感」がパフォーマンスに正の影響を与えるという点は、多くの先行研究と同じ結果となった。英語に自信のないリメディアル対象の学生にとっても、パフォーマンスを向上するために「自己効力感」が重要であることが確認された。一方で、Pintrich & De Groot (1990)では、三要素がすべてパフォーマンスに正に有意な影響を与えるという結果を報告していたが、異なる結果となった。「内発的価値」は、上位群では影響が確認されず、下位群ではパフォーマンスに対して負の影響を与えていた。リメディアル学生にとって、英語は大事だという認識はTOEICのスコアにはつながっておらず、つまり「内発的価値」が直接TOEICの学習につながるわけではないということが示唆された。英語に対する「内発的価値」の高さを、いかに英語学習に結びつけていくかという課題が浮き彫りになった。

(3) 文章評価とパフォーマンス・学習態度・文章観の関係解明

本調査では、文章評価力の育成に向け、評価シートを用いた自己・相互の文章評価活動における、評価とパフォーマンス、学習態度、文章観の関係を明らかにした。教員評価をパフォーマンスと見なし、自己評価との比較を行った結果、教員評価と自己評価には相関は見られず、評価のズレから、過大評価群と過小評価群に分かれた。ライティング授業では、自己評価について過大評価群だけでなく、過小評価群も存在し、他者評価においては両群とも過大評価する傾向があることが明らかになった。一方、パフォーマンス自体は過小評価群の方がむしろ高かった。文章作成に苦手意識をもつリメディアル学生においては、ダニング・クルーガー効果など、先行研究で指摘されているように、書けない学生ほど、自分の文章を過大評価し、ある程度書ける学生ほど、過小評価してしまう傾向が、調査結果から示唆された。「良い文章とはどのような文章か」という課題文章をテキストマイニングした結果、過大・過小、両群で、「理解」「伝える」「筋 通る」「書き手」「読み手(読む人)」とう単語が共通語として出現していた。一方で、過小評価群では「正しさ」という単語が特徴語として抽出された。この結果からは、過小評価群の学習者は、教科書や論文などの文章を「正しい」文章と認識して、自分の文章を過小評価している可能性が示唆された。本調査の学生コメントから、最終レポートは提出で終わり、ではなく、提出後の評価活動は学びにつながるということが示された。一方で、「他の人もできていないので安心した」というコメントもあり、相互評価活動をメタ認知能力やライティングスキルの向上にいかにつなげるかという課題も見えた。また、苦手意識はあるが、書く力の伸びつつある学生は、自分の文章を過小評価する傾向がうかがえ、こうした学生に対して、教員は「できている」と伝えることで、適性評価を促すと同時に、自信を育成する契機とする必要があることが教育的示唆として得られた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 渡 寛法、中島 宏治 | 4. 巻 14 |
| 2. 論文標題 リメディアル大学生の英語学習態度とパフォーマンスの関係 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 リメディアル教育研究 | 6. 最初と最後の頁 51～59 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18950/jade.2020.04.30.01 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件/うち国際学会 2件）

| |
|--|
| 1. 発表者名 Sayako Maswana, Hironori Watari |
| 2. 発表標題 Development of EAP writing materials that bridge EGP and EAP |
| 3. 学会等名 28th ETA International Symposium on English Teaching and Book Exhibit（国際学会） |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 マスワナ紗矢子・渡寛法・田地野彰 |
| 2. 発表標題 日本の英語学習者を対象とした EAPライティング教材研究 EGPからEAPへの円滑な移行に向けて |
| 3. 学会等名 第2回JAAL in JACET学術交流集会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Sayako Maswana, Hironori Watari |
| 2. 発表標題 Analysis of the use of acronyms in research articles |
| 3. 学会等名 The 2nd International Conference on English Across the Curriculum（国際学会） |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 中島宏治・渡寛法 |
| 2. 発表標題 英語リメディアル教育における学生の自立的学習態度とテストパフォーマンスの関係 |
| 3. 学会等名 第25回大学教育研究フォーラム |
| 4. 発表年 2019年 |

〔図書〕 計1件

| | |
|-------------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 田地野彰・マスワナ紗矢子・加藤由崇・渡寛法・山田浩 | 4. 発行年 2020年 |
| 2. 出版社 朝日出版 | 5. 総ページ数 88 |
| 3. 書名 はじめてのアカデミックライティング | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|